

子供を主語にした学びの実現を目指して

— 子供に学びを委ねる上で、学びの質を高める学習環境の工夫・教師の関わり —

義務教育研究係

指導主事 橋本 亮

長期研修員 安藤 千雨

《研究の概要》

本研究は子供を主語にした学びの実現を目指したものである。教師が「～させる」授業から、児童生徒が「～する」授業への改善を進め、子供が学習内容や方法を選択・決定する「学びを委ねる」場面を設定した。単元・題材構想や学習材といった「学習環境の工夫」と見取りに基づく言葉掛けによる「教師の関わり」の手立てを講じる。学びの質を高める際に「見方・考え方」「協働的な学び」「価値付け・方向付け」の三つの視点が欠かせないと考え、手立てにこの三つの視点を掛け合わせた実践を行った。その結果、学びを自分事として捉え、自ら学びに向かおうとする子供の姿が見られた。さらに、協働や対話を通して、考えを広げ、深めたり、自身の学びを調整しながら学びを進めたりする様子が見え、子供の学ぶ力を伸ばし、学びの質を高めるためには、伴走者としての教師の関わりが重要な役割を担うことが明らかになった。

キーワード 【学習指導法 学習環境の工夫 教師の関わり 見方・考え方
協働的な学び 価値付け・方向付け】

群馬県総合教育センター

分類記号：F02-01 令和7年度 288集

本報告書に掲載されている商品又はサービスなどの名称は、各社の商標又は登録商標です。

<各社の商標又は登録商標>

Google スプレッドシートは、Google LLCの商標又は登録商標です。

なお、本文中には ™ マーク、® マークは明記していません。

I 研究の背景

「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出し、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」¹では「授業の中で『個別最適な学び』の成果を『協働的な学び』に生かし、更にその成果を『個別最適な学び』に還元するなど、『個別最適な学び』と『協働的な学び』を一体的に充実し、『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善につなげていくことが必要である」と示されている。そして、群馬県教育ビジョン（第4期群馬県教育振興基本計画）²では、最上位目標に「自分とみんなのウェルビーイングが重なり合い、高め合う共生社会へ向けて一ひとりひとりがエージェンシーを発揮し、自ら学びをつくり、行動し続ける『自律した学習者』の育成」と示されている。この背景のもと、令和6年度から学校教育の指針では、確かな学力の育成のため、各教科等において主体的・対話的で深い学びの実現を目指した授業改善が推進されている。その中で、教師が「～させる」授業から、児童生徒が「～する」授業へと改善する方向性が明示されている。

これを受け義務教育研究係では、「子供を主語にした学びの実現を目指して」という主題で、教師が「～させる」授業から、児童生徒が「～する」授業への転換を図る研究を進めてきた。まず、初年度である令和6年度は、「子供が選択・決定する場面の多い授業形態」を取り入れた授業改善を行った。実践教科は小学校算数科・社会科、中学校理科・美術科の4教科で研究を進めた。その中で、子供の主体的な学びが促され、必要感のある対話が行われるなどの成果が見られ、教師が「～させる」授業から、児童生徒が「～する」授業への一つの有効な方法であることが示唆された。そこで、2年目である今年度は、初年度の手立てに加え、更に学びの質の高まりに焦点を当てて研究を進めることにした。

以上のことにより、「子供を主語にした学びの実現を目指して」という主題のもと、「子供に学びを委ねる上で、学びの質を高める学習環境の工夫・教師の関わり」という副主題を設定し、研究を進めていくこととした。

II 研究のねらい

小学校算数科、中学校国語科・理科・音楽科において、子供を主語にした学びの実現に向けた実践事例及び、学びの質を高めるための手立てを提案する。

III 研究の内容

1 基本的な考え方

義務教育研究係では、研究を進める中で、学習する内容や方法を子供自身が選択・決定することを「学びを委ねる」とした。しかし、教師の意図や見通しが不明な中で子供に学びを委ねると、それは単なる放任となってしまう、学びの質が低下する可能性がある。子供の学びの質を担保し、資質・能力の育成を確実に進めていくためには、教師の役割が重要であると考えた。教師の役割は多岐にわたるため、特に「学習環境の工夫」と「教師の関わり」に着目して手立てを講じることとした。「学習環境の工夫」とは、単元・題材構想や学習材の準備、場や空間の設定などを含んだ間接的支援を指す。また、「教師の関わり」とは、授業内で見取った子供の学習状況に応じて行うフィードバックや協働を促す言葉掛けなどの直接的支援を指す。

さらに、学びの質を高めるために、「見方・考え方」を働かせる、「協働的な学び」を促す、学びの「価値付け・方向付け」を行うの、三つの視点が重要であると考えた。以下に、三つの視点と、子供が選択・決定する場面の多い授業形態における学びの質の高まりとの関係について基本的な考え方を述べる。

(1) 「見方・考え方」を働かせる

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総則編³では、「深い学びの鍵として『見方・考え方』を働かせることが重要になる」としている。また、「児童生徒が学習や人生において『見方・考え方』を自在に働かせることができるようにすることにこそ、教師の専門性が発揮されることが求められる」と示されている。つまり、子供が選択・決定する場面の多い学習形態においても、深い学びの鍵である各教科等の「見方・考え方」を働かせることは資質・能力を育成する上で欠かすことはできず、そのためには教師の専門性を発揮した意図的・計画的な手立てを講じることが必要である。

¹ 中央教育審議会（2021） 「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出し、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」文部科学省

² 群馬県教育委員会（2024） 「群馬県教育ビジョン（第4期群馬県教育振興基本計画）」

³ 文部科学省（2018） 「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総則編」

(2) 「協働的な学び」を促す

「主体的・対話的で深い学びの実現」に向けた授業改善につなげるために「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を図ることが重要である。子供が選択・決定する場面の多い授業形態においては、個別最適な学びが促進される一方、孤立した学びに陥ることが危惧される。学びの質を高めるためには、多様な他者との対話・交流は不可欠であるため、協働を促す「学習環境の工夫」や「教師の関わり」により「個別最適な学び」と「協働的な学び」の往還をより一層充実させていく必要がある。

(3) 学びの「価値付け・方向付け」を行う

自律的に学ぶ子供を育成するためには、自身の学びの状況を客観的に捉え、目標達成に向けて学びの調整を図る力を育成する必要がある。子供が選択・決定する場面の多い授業形態では、自らの学習計画に沿って学ぶことができる一方、活動の目的を見失ったり、自身の学び方に自信がもてなかったりする場合がある。そのため、自身の学びを客観的に捉えられるような学習材や、必要に応じて学びの調整を行うことができるような単元・題材構想などの工夫を行う。さらに、子供が安心して学びを進めることができるように、子供の学習状況の見取りに基づいた、承認や称賛、助言などを行う。

以上、教師の役割に、三つの視点を掛け合わせた具体的な手立てを講じることが、子供に学びを委ねる上で、学びの質を高めることに有効に働くと考える。

IV 各教科の研究内容（別紙参照）

V まとめ

1 成果と気付き

子供に学びを委ねる上で、学びの質を高めるための教師の役割に、三つの視点を掛け合わせた手立てを講じた結果、以下の成果と気付きが得られた。

(1) 成果

- 子供が学びを調整できるような単元・題材構想を行うことや、何を手掛かりに学習を進めればよいか分かる学習材の準備などの学習環境の工夫を行った。また、教師は新たな視点を示したり、思考をゆさぶるような問い返しを行ったりした。その結果、単に知識の暗記にとどまらず、根拠に基づいて説明したり、既習事項と関連付けて考えたりする姿が見られた。これらのことにより、子供は見方・考え方を働かせ、納得のいくまで追究したことで、単元・題材における課題を解決することができた。
- 思考を可視化し、他者と共有ができる学習環境の工夫を行ったり、子供同士をつなぐ言葉を掛けたりするなどの支援を行ったことにより、協働的な学びが促され、自分と他者の考えの違いを感じることで、子供は更に自分の考えを練り直す姿が見られた。他者との考えの違いから、試行錯誤を繰り返す中で、子供は各教科の見方・考え方を働かせ、自分にはない多角的な視点で思考を深めていった。協働的な学びと個別最適な学びを往還したことで、子供は自分の考えを広げたり、深めたりすることができた。
- 振り返りに対する肯定的なフィードバックや新たな視点を与えるフィードバックなど学びの価値付け・方向付けを行ったことで、子供は自身の考えのよさを実感したり、学び方に関して自信や達成感を得たりすることができた。子供は自分に合った学び方を見付け、学びの調整を繰り返しながら、安心して学びを進めることができた。

(2) 気付き

- どの教科においても、「やってみたい」「なぜ」「どうして」と子供の内面から湧き出る問いを出発点とするような導入の工夫が、学びを自分事化させ、粘り強い学びを支える確かな手立てとなることが再認識できた。
- 子供に学びを委ねる上で、学びの質を高めるためには教師の役割が非常に重要であるということが分かった。子供に学びを委ねることは、子供の学ぶ力を信じ、子供自身の力で学びを進めていけるように待つことも大切であるが、子供一人一人の可能性を最大限に引き出すという関わりを意識して子供を支援することも必要である。
- 子供に学びを委ねることで、子供が本来もつ学ぶ力を発揮することができる。子供に学びを委ねるからこそ、教師は子供の思考やつまづきを丁寧に見取り、適切なタイミングで言葉を掛けるなどの支援を行う「伴走者」としての役割が重要である。

2 提案

子供を主語にした学びを実現するためには、まずは子供の学ぶ力を信じることが大切である。子供の実態を捉え、子供に学びを委ねる場面を想定し、単元・題材を構想していく。さらに、学びの質を高めるた

めには、教師の専門性を発揮し、学習環境の工夫と教師の関わりに「見方・考え方」「協働的な学び」「価値付け・方向付け」の三つの視点を掛け合わせることを意識して、授業づくりをしていくことが大切である。

子供に学びを委ねるからこそ見えてくる子供の姿を丁寧に見取り、どのように支援していくのかを考え、子供と共に授業を創り上げていくという授業改善の楽しさを実感すること、そして、これまでの指導観を更新し、日々の実践に向けて教師自身もまた、柔軟に試行錯誤を続けていくことが肝要である。

<引用文献>

- 1) 中央教育審議会(2021) 「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出し、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)」 文部科学省
https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf (2025-11-12)
- 2) 群馬県教育委員会(2024) 「群馬県教育ビジョン(第4期群馬県教育振興基本計画)」
<https://www.pref.gunma.jp/site/kyouiku/628639.html> (2025-11-12)
- 3) 文部科学省(2018) 「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説総則編」

<参考資料>

- ・群馬県教育委員会(2025) 「令和7年度 学校教育の指針」

IV-3 中学校音楽科における授業の実践

1 授業実践①

(1) 育成を目指す生徒像

本実践では、「音楽的な見方・考え方を自在に働かせながら、試行錯誤を通して学びを深めていく生徒」の育成を目指した。ここでいう「試行錯誤を通して学びを深めていく」とは、試行錯誤を通して自己のイメージを豊かに表現することであり、「音楽的な見方・考え方を働かせる」とは、音色、リズム、テクスチャ、構成など音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自分たちの演奏を聴き直したり他者の作品と比較したりしながら、表したい音楽表現についての「思いや意図」を明確にし、自己のイメージに近づくよう表現を改善していくことである。

具体的には、次のような姿を想定した。

- ① 表現したいイメージを明確にし、その実現に向けて音の重ね方や音色を工夫しながら創作を進める姿
- ② 試行錯誤の過程で、重ね方ブースや音色ブースを行き来しながら表現を試し、お試し・録画ブースで自分たちの演奏を振り返るなど、学習環境を活用して、音楽を形づくっている要素を手掛かりに表現を捉え直していく姿
- ③ 次に取り組む課題を自ら選択・決定し、試行錯誤しながら創作していく姿

このような姿が追求する過程で見られるよう、授業を構想した。

(2) 題材名、目標

題材名	「音の特徴や重なりを感じてリズムアンサンブルをつくろう」 教材名 Let's Create! (中学生の音楽2・3年下 教育芸術社)
題材の目標	〔学習指導要領：A表現(3)ア、イ(イ)、ウ、共通事項(1)ア〕 【知識及び技能】 音素材の特徴及び音の重なり方や反復、変化、対照などの構成上の特徴について理解するとともに、創意工夫を生かした表現で音楽をつくるために必要な課題や条件に沿った音の選択や組合せなどの技能を身に付ける。 【思考力、判断力、表現力等】 音色、リズム、テクスチャ、構成を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、まとまりのある創作表現を創意工夫することができる。 【学びに向かう力、人間性等】 音素材の特徴及び音の重なり方などの構成上の特徴に関心をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に創作の学習活動に取り組もうとする。

(3) 子供に学びを委ねる事項

○ 創作手順

創作にあたっては、はじめに生徒が曲のイメージとリズムパターンを決定した上で、音色、テクスチャ、構成など、本題材のねらいを達成するために必要な音楽を形づくっている要素のうち、どの要素からどのような順序で学習活動に取り組むかを、生徒自身が選択・決定できるようにする(図1)。

○ 学習場所

教室全体に、生徒が試行錯誤を重ねながら創作表現を検討できる場として「試行ブース」を設置する。具体的には、音の重ね方を試しながら構成やテクスチャを考える「重ね方ブース」、音色による違いを試す「音色ブース」、演奏を録画して振り返る「お試し・録画ブース」



図1 創作手順

などを設け、生徒が自らの課題に応じて自由に行き来しながら学べるようにする。

○ 学習ペース

ペア計画表(ペアで活動計画を立てるためのワークシート)
(図2)を活用し、どの活動にどれくらいの時間を配分するかをペアで話し合い、調整できるようにする。

説明5分	
【音色】 どんな音を使うか ()分	【構成・テクスチャ】 リズムをどう重ねるか ()分
お試しタイム・録画 ()分	
提出・振り返り10分 ※提出は【学習タスク】	

図2 ペア計画表

(4) 手立て

	見方・考え方	協働的な学び	価値付け・方向付け
学習環境の工夫	<p style="text-align: center;">試行ブース 「重ね方ブース」「音色ブース」「お試し・録画ブース」</p> <p style="text-align: center;">ワークシート</p>		
	学習タスク	ペア計画表	学習タスク・ペア計画表
教師の関わり	<p style="text-align: center;">生徒の学びを見取った上での 見方・考え方を働かせたり、協働的な学びを促したりする ゆさぶりや問い返し</p>		

① 学習環境の工夫

○ 試行ブースの設置

音素材の特徴及び音の重なり方や反復、変化、対照などの構成上の特徴について理解して、創意工夫できるよう、「試行ブース」(図3)を設置する。「重ね方ブース(構成・テクスチャ)」と「音色ブース」の二つのブースでは、実践的に学ぶ学習活動を通して、生徒が音楽を形づくっている要素とその働きに意識的に目を向けながら試行錯誤できる学習環境を整える。また、「お試し・録画ブース」を設置し、自分たちの演奏を客観的に振り返ることができるようにすることで、知覚したことを根拠に表現を見直すなど、音楽的な見方・考え方を働かせた試行錯誤が行われるようにする。

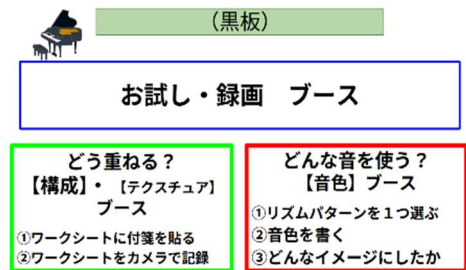


図3 試行ブース教室配置図

○ 学習タスクの提示

音楽を形づくっている要素(音色、リズム、テクスチャ、構成など)ごとに創作の手順を細分化し、学習の視点・条件・ヒントとなる学習タスク(図4)として提示する。

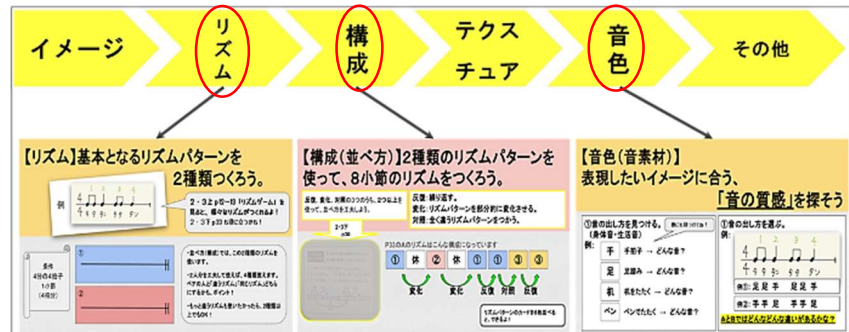


図4 学習タスク(一部)

学習タスクに示した音楽を形づくっている要素は、生徒が創作に取り組む際の学習の視点であり、タスク内の「リズムパターンを2種類つくろう」や「8小節のリズムをつくろう」などの記述は、今回の創作の条件である。また、構成やリズム等、具体的な例示や教科書を参考にすることを促す問い掛けがヒントとして示されている。

○ ペア計画表の活用

ペア計画表を活用し、学習の計画、調整の場面で、「どのブースの学習に取り組むか」「どの音楽を形づくっている要素を優先するか」「どの程度の時間をかけるか」といった点について、ペアまたはグループで話し合う環境を意図的に整えることで、協働的な学びを促す。

○ ブースの掲示物の共有

各ブースに他のペアまたはグループが作成した構成案や選択した音色等を掲示し、参照資料とする。これにより、他者の考えや試行の過程を手掛かりに学びを進められる環境を整え、相互に影響を受けながら対話を通して学びを深めていく協働的な学びを促す。

② 教師の関わり

実際の授業で生徒の学びを見取った上で、見方・考え方を働かせたり、協働的な学びを促したりするためにゆきぶりや問い返しの言葉掛けを意識的に行う。

(5) 実践の具体

【場面① 試行ブースでの試行錯誤と生徒の変容】

「追求する」過程において、話し合いのみでは、音の重なりに対する具体的なイメージがもてず、創作が停滞しているグループが見られた。教師は、まずは各自が考えたリズムパターンを実際に重ねることが必要であると考え、「他の班は、どんな重ね方をしているのか」に注目するよう促した。

すると、生徒たちは「重ね方ブース」に掲示されている他のペアまたはグループの構成案(図5)を参照しながら、自分たちのリズムパターンの重ね方を検討するようになった。他者の構成案と自分たちの考えを比較することが、学習の見通しをもち、次の学びへ進むきっかけとなった。また、実際に音を重ねる中で「テクスチャ(リズムパターンが同時、または交互にどのように重なり合うかという関係性)」に着目するようになり、試行の方向性が明確になっていった。

このような過程の中で、生徒は音の重なり方に着目しながら試行を重ね、次に取り組む方向性を見いだしていた。

【場面② 試行ブースを行き来しながら次の課題を選択する学び】

「追求する」過程から「まとめる」過程において、創作から録画まで一通りの学習活動を終え、それ以上の試行錯誤に向かっていないペアが見られた。しかし、知覚したことと感受したことを往還させ、表したい音楽表現により近づけてほしいと考え、「もっとイメージに合う表現にするにはどうしたらいいか」と問い掛けた。

すると、生徒は「お試し・録画ブース」で録画した自分たちの演奏動画を見返し、「重ね方ブース」と「音色ブース」(図6)を行き来しながら、音楽的な見方・考え方を働かせ、表したいイメージに近づくために音色を改善するという見通しをもって、試行錯誤を進めた。

このように、生徒は自分たちの表現を捉え直し、音色や重ね方といった音楽を形づくっている要素に着目しながら、次に取り組む課題を見だし、試行錯誤を続けていた。

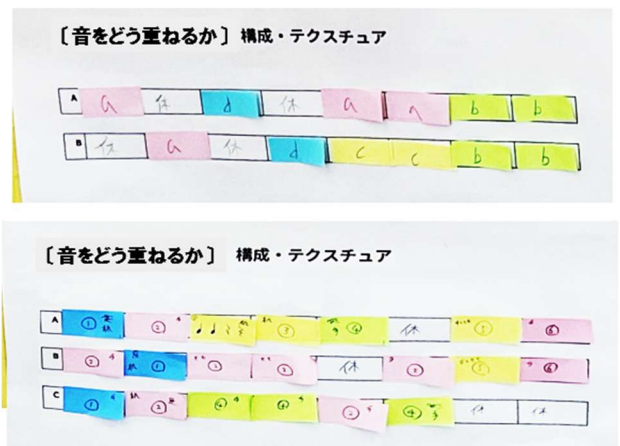


図5 構成案(音の重ね方のワークシート)



図6 音色ブース

【場面③ 協働的な学びによる方向付け】

「追求する」過程から「まとめる」過程において、「お試し・録画ブース」で録画した演奏を見返し、自分たちの演奏について「足音が聞こえない」「もっと響かせたい」といった音色に着目した課題を見付け、どのような音色であればイメージに近づくかを協働的に検討するグループが見られた（図7）。



図7 生徒の様子

その後、音楽室にある楽器以外の物も試しながら、音色や音の響きを確かめ、指揮台を使って足音を響かせるという工夫を行った。これらの工夫は、「体育の時間に元気に活動しているような雰囲気」を表したいという当初のイメージに近づけるためであった。また、指揮台を使うという手段が決まった後も、何度も録画し、音色を確認しながら試行錯誤する様子が見られた。

このように、録画を見返しながらか音色や音の響きを確かめる中で、生徒は表現の課題を共有し、音色に着目して協働的に試行錯誤を重ねながら、よりよい音楽表現を目指していた。

2 授業実践②

(1) 育成を目指す生徒像

本実践では、「音楽的な見方・考え方を自在に働かせながら、試行錯誤を通して学びを深めていく生徒」の育成を目指した。ここでいう「試行錯誤を通して学びを深めていく」とは、音楽の構造と自分の感情を関連付けて、音楽のよさや美しさを豊かに味わうことであり、「音楽的な見方・考え方を働かせる」とは、音色、リズム、旋律、テクスチャなど音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、複数の音楽を比較したり音楽の特徴を文化的・歴史的な背景と関連付けたりしながら、音楽表現の共通性や固有性を見だし、自己のイメージや感情を捉え直すことで、アジア各地の音楽のよさや美しさについて自分なりの評価をもつことである。

具体的には、次のような姿を想定した。

- ① 初発の感想や曲の印象を手掛かりにしながら音楽を形づくっている要素に注目して聴き直す姿
- ② 複数の音楽を比較しながら他者との対話を通して音楽の共通性や固有性に気づき自分の捉えを更新していく姿
- ③ 次に確かめたい視点や問いを自ら選択・決定しながら繰り返し音楽に立ち戻って聴き方を深めていく姿

このような姿が追求する過程で見られるよう授業を構想した。

(2) 題材名、目標

題材名	「音楽の多様性を理解して、アジア各地の音楽のよさや美しさを味わおう」 教材名 アジアの諸民族の音楽（中学生の音楽1年 教育芸術社）
題材の目標	〔学習指導要領：B鑑賞ア(ウ)、イ(ウ)、共通事項(1)ア〕 【知識及び技能】 アジア地域の諸民族の音楽の特徴と、その特徴から生まれる音楽の多様性について理解することができる。 【思考力、判断力、表現力等】 アジア地域の諸民族の音楽表現の共通性や固有性について自分なりに考え、それぞれのよさや美しさを味わって聴くことができる。 【学びに向かう力、人間性等】 アジア地域の諸民族の音楽の特徴に関心をもち、主体的・協働的に鑑賞の学習活動に取り組むとともに、音楽の多様性を認め大切にする態度を養う。

(3) 子供に学びを委ねる事項

○ 音楽の聴き方

個々の端末で聴ける音源リンクや、イヤホンスプリッター（複数人で音楽を共有する分配機器）を用意し、一人でも、グループでも音楽を聴ける学習環境を整えることで、生徒が自分に合った聴き方を選択・決定できるようにする。

○ 情報収集

比較ブースに、「スタートアップシート」（初発の感想や曲の印象をグループで書き留めた、鑑賞の視点を見いだすための参照資料）や「比較シート」（それまでの学びから共通性や固有性を整理できるようにした、二種類の選択制のシート）、音楽を形づくっている要素の補助資料、写真資料を配置し、どの資料を、どのタイミングで参照するかを生徒が選択・決定できるようにする。

○ 学びの整理

聴き比べた内容を整理するための「比較シート」を、生徒の聴き取りの段階や学び方の違いを想定して、ベン図型・表型の二種類の形式で用意し、生徒が自分の考えを整理しやすい形式を選択・決定できるようにする。

○ 他者や教材との対話

同じ音楽を選択した生徒が集まるグループ席を設け、生徒同士で対話しながら音楽を繰り返し聴き直し、音楽の特徴を捉えていく学習活動となるようにする。さらに、教材も対話の対象となるよう資料を整え、他者や教材との往還を通して鑑賞を深められる学習環境を整える。

(4) 手立て

	見方・考え方	協働的な学び	価値付け・方向付け
学習環境の工夫	比較ブース 「スタートアップシートブース」「比較シートブース」 「音楽を形づくっている要素の補助資料ブース」「国や楽器の写真資料ブース」 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> スタートアップシート 比較シート </div>		
		座席配置 音源リンク イヤホンスプリッター	ログシート（振り返り）
教師の関わり	気付きを促す 知覚と感受をつなぐ 構造と背景を関連付ける	協働する必然性を生む 学びの広がり、深まりの実感	新たな問いや視点を提示する 生徒の気付き→視点→次のステップ <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> 言葉掛け 受容 称賛 ゆさぶり 問い返し </div>
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> 一連の流れの中で行われる </div>		

① 学習環境の工夫

○ 比較ブースの設置

生徒が課題に応じて必要な資料を選択できるように、「スタートアップシートブース」(図8)「比較シートブース」「音楽を形づくっている要素の補助資料ブース」「国や楽器の写真資料ブース」の四つのブースを設置する。各ブースでは、知覚したことと感受したことを往還させながら音楽の特徴を捉えたり、音楽と文化的背景との関連を考えたりするなど、音楽的な見方・考え方を働かせられるようにする。



図8 スタートアップシートブース

○ 選択制の比較シート

学びの整理に用いる比較シート(図9)は、生徒の聴き取りの段階や学び方の違いを想定し、ベン図型と表型の2種類のシートを準備する。ベン図型は、生徒が感性を手掛かりに比較を始めると、次第に音楽を形づくっている要素に着目して、共通性や固有性へ考えを深めていくことができる。表型は、音楽を形づくっている要素を手掛かりに比較することで、共通性や固有性へ考えを深めていくことができる。また、出来上がった比較シートをブースに掲示して、聴き方や気付きのヒントとなるようにする。



図9 選択制の比較シート

○ 座席配置とICT機器の工夫

生徒が音楽を繰り返し聴き直ししながら他者の捉えと照らし合わせていく学習活動を想定し、同じ音楽を選択した生徒が集まるグループ席を配置するとともに、個人の端末から音楽を再生できる音源リンク(図10)や複数人で同時に音楽を聴くことができるイヤホンスプリッターを準備する。さらに、一人で聴き直す場面と仲間と確かめ合う場面とを柔軟に行き来できるようにすることで、個別と協働を往還しながら学びを深めていけるようにする。



図10 音源リンク

○ ログシート(振り返り)

生徒の気付きや捉え方の変化を次の学習へとつなげていくため、ログシート(振り返り)(図11)は、校内の学習管理システム上に蓄積される共有型の記録として、毎時間の学習の履歴が蓄積されるようにした。また、教師がその記述を随時確認することで、学びの過程を価値付けたり、必要に応じて学習の方向を調整したりするための資料として活用した。

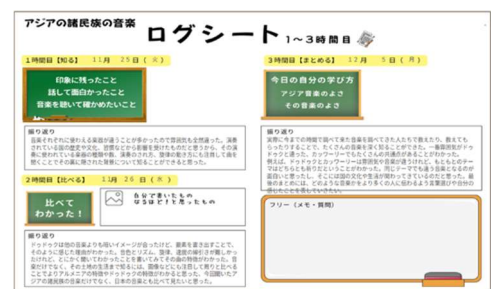


図11 ログシート

② 教師の関わり

○ 気付きを促す

生徒の初発の感想を受け止め、「どうしてそう聴こえたのだろうか」「それは音楽にどう表れているのだろうか」と問い返すことで、音色や旋律、リズムなどに着目させ、感覚的な捉えから音楽を形づくっている要素に基づく捉えへと移行していくことを意図した関わりを行う。

さらに、写真資料や音源を手掛かりに、音楽と生活や文化とのつながりを捉え直せるようにし、「それは音楽にどう表れているのだろうか」と再度問い返していくことで、構造と背景を関連付けて考察できるようにする。こうした関わりを通して、生徒が音楽的な見方・考え方を働かせながら課題解決に向かうことを目指す。

○ 協働する必然性を生む

生徒の発言や記述を手掛かりに、用いられている楽器の音色、旋律の動き方、リズムや拍の感じ方、音楽の構成などの視点を示し、その音楽が生まれた地域の文化や生活との関わりについての考えを引き出すとともに、生徒同士をつなぐ教師の関わりを行う。これにより、生徒が互いの考えを手掛かりに学びを広げ、深めていく実感を味わい、協働する必然性が生まれるように関わる。

○ 生徒の学びを価値付け、方向付ける教師の言葉掛け

生徒の気付きを受け止め、視点を添えながら学びを次の学びへ導く関わりを意図的に行う。そのために、生徒の発言や行動から、生徒の学びを丁寧に見取り、新たな問いや視点を提示し、生徒自身が次の学びの見通しをもてるようにする。具体的には、生徒の気付きを受容し価値付ける称賛の言葉掛けに加え、考えをゆさぶる問いや次の視点を促す働き掛け、学びの方向を確かめる問い返しなどを組み合わせて用いることで、学びを価値付け、方向付けていく。これらの教師の関わりは場面ごとに切り離されたものではなく、生徒の学びを見取りながら、状況に応じて関わる一連の流れの中で行う。

(5) 実践の具体

【場面① 生徒の学びが多様化した場面】

第2時と第3時の「追求する」過程において、開始当初は各グループで比較ブースの資料を参照（図12）したり、同じ音楽を聴き合ったりするなど、グループ内の学習活動に大きな違いは見られなかった。

しかし、追求が進む中で、教師が生徒一人一人の学習の様子を見取り、生徒の「不気味に聴こえる」といった気付きに対して「なぜそう聴こえたのか」と問い返したり、「テンポが一定ではない」という気付きに対して「どの部分でそう感じたのか」と具体化を促したりした。さらに、こうした気付きに基づいて音楽を聴き直していくことを価値付け、「このように音楽を聴いていけば追求できそうだ」と生徒が見通しをもてるように方向付けた。こうした問い返しと価値付けを通して、生徒の気付きは音楽を形づくっている要素とその働きの視点へと向かい、それぞれの課題意識が明確になった。その結果、同一グループ内でも参照資料や聴取方法が多様化した。



図12 比較ブースの資料を参照する姿

【場面② グループでの鑑賞を通して音楽の聴き方が変容した場面】

これまでの授業では、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で音楽を捉えるために、旋律を歌って確認するような活動は、教師主導で行われることが多く、生徒が必要感をもって主体的に取り組んでいるとは言い難かった。

しかし、本実践では、生徒の「どうしたら旋律や音色の特徴を捉えられるのか」という課題意識に対し、教師が一つの解決の方策として提案したことで、生徒が主体的に旋律を口ずさみながら、旋律や音色の特徴や変化に着目し、楽しみながら活動している様子（図13）が見られた。そのような学習の中で、生徒は旋律や音色の変化、それらが生み出す音楽の特徴を捉え直し、繰り返し音楽を聴きながら意見を交流していた。



図13 楽しみながら活動する姿

【場面③ 個別と協働を往還しながら学びを深める場面】

学びを生徒に委ねたことで、生徒が自らの学習を調整しながら鑑賞を深める姿が見られるようになった。仲間と集まり活発に意見を交流する姿だけでなく、個別に取り組む時間が確保されたことで、納得がいくまで黙々と考え続ける生徒の姿も見られた。そうした生徒に対しては、教師が記述や発言から学びを見取り、価値付けを行いながら必要に応じて他者との対話へとつなぐ関わりを行った。その結果、生徒は必要感をもって個別の学びから協働的な学びへと移行し（図14）、再び個別に戻るという往還を繰り返しながら鑑賞の学びが充実していった。



図 14 協働的に学ぶ姿

3 成果

二つの実践を通して、生徒が音楽的な見方・考え方を自在に働かせながら、必要感をもって学びに向かい、試行錯誤しながら、表現や聴き方を更新していく姿が明確に見られるようになった。

創作の実践では、他者の構成案や音色の工夫、自己の表現を参照しながら表現したい音楽についての自らの思いや意図を捉え直し、音の重なり方や音色といった観点から表現を改善していく姿が見られた。また、鑑賞の実践においても、複数の音楽を比較することを通して、曲の印象や初発の感想を起点に課題意識をもち、繰り返し音楽に立ち戻りながら自らの聴き方を更新していく姿が見られた。授業後のアンケートにおいて「何度も聴き直した」「音楽の特徴を意識して聴いた」といった記述が多く見られたことから、こうした変容が裏付けられる。

さらに、学びを生徒に委ねたことで、生徒は一人一人の課題意識や学習スタイルに応じて、個別に探究する学びと、仲間と対話し考えを確かめ合う協働的な学びを柔軟に往還するようになった。その過程で、音楽を形づくっている要素や構造を根拠に示しながら互いの考えを交流し、学びの広がりや深まりを実感している様子が見られた。

4 おわりに

本研究を通して、教師があらかじめ関わり方を想定しつつ、授業中の生徒の気付きや変化を丁寧に見取り、その場に応じて教師の関わりを調整していくことが、生徒の学びを支える上で重要であることが明らかになった。教師の問い返しやゆさぶりをきっかけに、生徒が音楽的な見方・考え方を働かせ、その学びが価値付けられ、次の新たな問いへとつながっていく一連の流れが見られたことから、「想定」と「見取り」に基づく意図的な関わりが、生徒の自律（立）的な学びを成立させる重要な条件であることが示唆された。

また、こうした実践を通して、教師の役割は、生徒の学びに寄り添いながら受容や称賛によって価値付けを行い、新たな問いや視点を提示することで次の学びへと方向付けていく伴走者としての関わりであることを再認識した。

今後は、本研究で得られた知見を他の題材や学年、領域にも広げ、生徒がより主体的・自律（立）的に学びを深めていける授業づくりの在り方を更に検討していきたい。

<参考文献>

- ・文部科学省編（2018）『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編』
- ・国立教育政策研究所教育課程研究センター（2020）『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校 音楽』
- ・群馬県教育委員会（2025）『令和7年度 学校教育の指針』
- ・群馬県教育委員会義務教育課編（2019）『はばたく群馬の指導プランⅡ』

<担当指導主事>

塚本 紗央里 柳川 祥恵